

学生代表挨拶

寒さが次第に緩み、早春の息吹を感じる季節となりました。本日、私たち 84 名は、富山県立総合衛生学院・看護学科の最後の卒業生として、閉科の日を迎えることとなりました。

昭和 26 年に富山県立中央病院附属高等看護学院が設立され、以降多くの卒業生を輩出してきました。昭和 46 年に富山県立総合衛生学院に改称、平成 20 年には第二看護学科閉科とともに第一看護学科を看護学科に改称し、私たち 50 回生の卒業を最後に、閉科となります。

世界では新型コロナウイルス感染症が流行し、国内においても感染が拡大しています。感染予防のために日常の当たり前が当たり前でなくなり、私たちの学生生活は一変してしまいました。緊急事態宣言が発令された 4 月の臨地実習は自宅での実習に変更となりました。未知の感染症の収束が見通せないなか、先生方は私たちが自宅においても臨地実習に近い学びができるように丁寧に指導をしてくださいました。臨地実習再開後は、病棟の学生受け入れ人数の減少によって、学内実習となることも度々ありました。例年より臨地に立つことができる日数は減少しましたが、限られた時間の中でも、臨地実習指導者の熱心なご指導により充実した学びを得ることができ、無事に実習をやり遂げることができました。新型コロナウイルス感染症が流行している環境下にあっても、学生が学び続けることができる環境を整えてくださった病院関係者の方々には、感謝の気持ちでいっぱいです。

臨地実習では、多くの患者さんとの出会いがありました。特に印象に残ったのは、終末期の患者さんとの関わりです。患者さんは、入院当日に余命 1~2 週間であることが告げられました。コミュニケーションをとる中で、腹水や下腿の浮腫により、動きにくさや体動による呼吸困難感があるものの、自分でできることは自分でしたいという強い思いがあることがわかりました。排泄や寝衣交換では、ほとんどの動作に介助が必要でしたが、自尊心が低下しないよう、患者さんの力でできることを支えようと努力しました。また、入院 7 日目には患者さん本人と家族の希望で一時帰宅することができました。患者さんが「家の空気を吸ってこられてよかった」と笑顔で話された姿を今でも鮮明に覚えています。

看護の道は、平坦ではありません。患者さんへの看護を実践する中で、自身の未熟さにもどかしさを感じ、個人に応じた最良の看護について悩むことが多くありました。しかし、私たちにはいつも悩みを分かち合える仲間がいました。そして、親身に話を聴き、励ましてくださる先生方の存在がありました。私たちは決して一人の力ではなく、多くの支えの中で成長することができました。

今、わが国では 2025 年の超高齢社会が目前にせまり、その後も増加し続ける 75 歳人口割合を見据えて、地域包括ケアシステムの構築が推進されています。このような時代の変化の中で看護職の役割は拡大し、人々が住み慣れた地域で安心して暮らすために看護を提供する看護職の役割がさらに重要となり、看護職への大きな期待と責任の重さに身が引き締まる思いです。

長い歴史のある富山県立総合衛生学院看護学科は閉科しますが、伝統ある学院で学び培った知識や技術を基に、対象に寄り添い、期待に応えることができるよう、今後も努力を続けていきます。そして、富山県立総合衛生学院看護学科の卒業生としての誇りをもって、社会に求められる看護職となり、保健医療福祉の向上に貢献したいと思えます。

最後に、私たちをご指導くださいました諸先生方、ご来賓の方々、そしてこれまで輝かしい伝統を築いてこられました諸先輩方に、心から御礼申しあげます。そして、皆様のご健康と益々のご発展をお祈りし、学生代表のことばといたします。

令和 3 年 3 月 4 日

富山県立総合衛生学院 看護学科
小林 実季